

古典の日絵巻「第四巻：琳派400年」



「四季草花文庫」神坂雪佳 高島屋史料館蔵

第19号：平成27年12月17日 神坂雪佳 —— 2

雪佳は四条派の鈴木瑞彦について絵を学んだ。四条派についての理解が写生中心の円山応挙の流派と重なり、写生重視の流派に見られている。雪佳と同じ四条派を学ぶ竹内栖鳳は、洋行し西洋絵画を見た。その動向はわが国と同じ写意に向かっていると感じた。この写意は円山派の写生とは違うところが多い。一つは歌心である。四条派が継承している俳句であり、蕪村・呉春に繋がる心情、絵師の心の中を写し取り、歌い上げる絵である。この歌心は古く和歌にあり、室町以後、申楽＝能楽に展開し、琳派が誕生した桃山期には歌舞伎へと広がる。栖鳳は上方歌舞伎の愛好者であった。

雪佳の歌心は能楽へ向い、歌と絵を結び付ける葦手絵つまり王朝美の世界を志向したのである。歌心と絵が合体する図案、突き詰めれば大和心とデザインが結晶する境地を希求したことになる。彼は西欧の世紀末藝術・アール・ヌーヴォーを嫌い、琳派の復興と日々の生活に結び付く工藝美を求めた。それは見るだけの世界ではなく、手に取り愛玩できる世界の実現にあった。

